雨の予報にもかかわらず、朝から日差しの照りつける一日だった。

この時期にしては気温があがり、日向にいると、少し汗ばんでくる気さえする。空は青く澄んで、ときおり流れる風が心地よかった。

中庭には、たくさんのベンチがあった。どれも自然に馴染むような、木目の美しいベンチだった。そこで本を読んだり、お弁当をひろげたり、他愛のないおしゃべりをしたり、生徒達は思い思いに時間を過ごした。陽光はやさしく、そんな彼らを見守っていた。

彼女はひとり、ちょうど図書館に面したところにあるベンチに座っていた。なにかを広げ、熱心に見入っている。あまりに夢中になっていたせいで、近づいてきた人影に気づくことができなかった。

「なにをそんなに見ているの」

突然、頭の上から降ってきた声に、彼女はギクッと腰を浮かした。

「なにもそんなに驚かなくても」

苦笑混じりにいって、その声の主は、彼女から持っていたものを取り上げた。そうすると、相手の顔が、はっきりとみえた。

「た、タカ君？」

「ひさしぶり。元気だった？」

「うん。タカ君も元気そうだね」

そういえば、期末が終わったということは、そろそろ彼が来る時期だった、と思い出した。

「もしかして、ハナも一緒？」

「いや。今回はお留守番」

律儀に答えは帰ってきたが、その後に続いたのは、苦笑だった。

「それくらい、本人から聞いてないのかい。君たち、連絡取り合ってるんだろ？」

しまった、やぶへびだった、と思ったのは、後の祭りだった。

「・・・まあ、ときどきは」

「ふーん、ときどき、ね」

　つぶやくように反芻した彼は、チラッと、視線を彼女に向けた。

「で、最後に連絡とったのはいつ？」

　口調は軽かったが、視線は鋭く、どうやらこれに関して、軽く流してくれるつもりはなさそうだった。

「・・・半年くらい、前、かな」

　そういうと、彼はホッと息をついて、彼女の横に視線をうつした。

「すわってもいい？」
「うん」

　彼が座ると、少しベンチが傾ぐのがわかった。彼と彼女では、あまりに体格の差が違いすぎる。横目で見ると、あいかわらずのスタイルの良さが、服の上からでもわかった。風が吹くと、かすかに良い香りがする。愛用の香水の名前は、前に聞いたような気もしたが、わすれてしまった。
　彼は高く足を組むと、両肘をベンチの背もたれに置くようにし、くつろいだ姿勢で言った。

「悩み事なんて、めずらしいな」

　彼女は、何か悩んでいるのか、という問いですらないことに、少し驚いた。

「もうそれ、決定事項？」
「音信不通になる理由が、他にあるの」
「それは・・・あるかもしれないじゃない」
「たとえば？」
「・・・・・・・・・いそがしかった、とか」
「ふぅん、なるほど。一理あるね」

　そういって彼は、先ほど取り上げたものに目をやった。

「試験勉強、とか」

　それで彼女は、自分がそれを取られたままなことに、ようやく気がついた。

「ちょっ――――――返して！！」

　あわてて取り返そうとしたが、相手が悪すぎた。腕のリーチでかなうわけなし、腕力はいうまでもなく、一枚も二枚も上手の相手なのだ。

　しかし、意味もなく人の嫌がることをする人でないのは彼女にもよくわかった。

「意外だな。君が成績にこだわるなんて」

　本気でそう思っているのが、驚いた表情から伝わってきた。

「そこまで懸命に勉強して、いい成績を取りたかったの？」

「あのね、それが学生の本分なの。学業第一なの。タカ君達みたいなのは、超例外なの。おわかり？」

「ま、否定はしないけど。それを君が言うのは、オレにはちょっと信じがたいね」

「だけど事実だもの。わたしはここずっと、ひたすら勉強していて、とても誰かに連絡を取る余裕なんてなかったのよ。そうハナにも伝えておいてよ」

「いいけど。成果はあったの？」

　さらっと聞かれて、彼女は答えに詰まった。さっきも、ずっとそれを考えていたのだった。うまくはぐらかせる相手でもなかったので、正直に言った。

「わからない」

「わからない？　目標値とか、そういうものはないの？」

「ない」

　今度は、はっきりと苦笑された。

「何かを目標に、努力をするんだろう？たとえば一番をとるとか、何点以上を取るとか、なんでもいいけれど、じゃあどうして急にやる気を出したんだい」

　その疑問は、ごもっともだった。彼女も同じことを考えていた。だけど、彼女には彼女なりの、がんばらなければならない理由があった。それは彼が言うような目標とは、だいぶかけ離れていたけれど、それでも、彼女にとっては、唯一無二の理由だった。

「自分が、どこまでできるのか、知りたかったの」

　ひとことひとこと、区切るように言ったのは、自分にこそ、言い聞かせるためだった。

「それなりに勉強して、それなりの成績は取れた。ずっとそんな感じだった。特に困ったこともなかった。だけど、言われたの。ひとが一生懸命がんばらないのは、言い訳の余地を残すためなんだって。全身全霊をかけても、できなかったら、もう言い訳ができないから、少し手を抜いて、本当は自分は出来る人間なのだけれど、力を出し切っていないから、いまはできないだけなんだって、そう自分に言い聞かせて安心しているって、自分の能力を直視できない弱虫の、言い訳だって・・・」

　淡々と言葉を紡ぐ彼女の横顔は、張り詰めてみえた。彼は静かに聞いていたが、口元には、どこか自嘲げな微笑みがうかんでいた。むかしの自分を、思い出したのかもしれなかった。それにしても、この言葉は少し極端でもあった。見方にだいぶ偏りがあった。しかし、それがわからない彼女でもないはずだった。彼は慎重に口を開いた。

「それで、ユキは全力を出して、どう思ったの。自分を客観的に評価できたの」

　彼女は力なく首を振った。

「たしかに、前回より成績は良かった。でもあれだけがんばっても、この程度なのか、とも思った。なにより、もっとがんばれたのかもしれないとも思う。気づくと勉強中に寝てたり・・・どうしてもやる気がでなくて、時間を無駄にしたり、そういうのも、結果から逃げているのかな、とか、考えれば考えるほど、なにがただしくて、なにがごまかしなのか、わからなくなって、結局わたしは、あの人がいる世界には、たどり着けない」

　思わず漏らした、最後の言葉に、彼女の願いが、つまっていた。